

# 中川霞城の狂言

——『少年狂言 二十五番 太郎冠者』を中心に——

藤 本 芳 則

はじめに

明治中期、児童文学分野で活躍した人物の一人に、中川重麗がいる。一八五〇（嘉永三）年生れで、明治を代表する児童文学作家巖谷小波より二〇年早い。一九一七（大正六）年没、号は、霞城、紫明、四明等。幼くして二条城番与力中川家の養子になり、京都でドイツ語を学ぶ。後年、「吾輩は寧ろ科学から学問を始めたので、唯物理学を信ずるものである」と述べているように、まず科学を学んだ。『理科春秋』などの、子ども向けの理科読物や教科書を執筆、教員として「理化、博物」などを担当したこともあるという。科学の方面ばかりではなく、早くから、海外の教育学、美学なども紹介している。児童文学方面の主な業績としては、理科読み物の執筆のほかに、子ども向けの雑誌『少年文武』を創刊したことがあげられる。一九〇四（明治三七）年には、俳誌『懸葵』を創刊し、俳人として活躍した。小波とは、ドイツ語に通じていたことや雑誌の編集に携わったこと、俳句に造詣が深いことなど、共通点が多い。

理科読物以外にも児童文学には注目すべき業績がありながら、俳人としての中川四明はともかく、児童文学関係でのまとまった研究は、小波に比べると乏しい。<sup>(5)</sup> 富田博之は、児童劇脚本の初めは、単行本では、霞城山人(中川重麗)『少年狂言 太郎冠者』(学齢館、明治二五年二月八日、以下『太郎冠者』)と巖谷小波『狂言 春駒』(博文館、明治二六年二月三日、以下『春駒』)とされてきたと述べ、<sup>(6)</sup> 『太郎冠者』一冊によっても「中川霞城は、小波にさきがけて、わが国の子どものための演劇の脚本を創り出すために努力した人として、忘れられない位置にあるといっても言いすぎということにはならないだろう<sup>(7)</sup>」と評価する。小稿では、従来ほとんど論じられていない霞城の狂言に焦点をあわせ、『太郎冠者』を中心に、なぜ霞城は、狂言に関心をもち、『太郎冠者』にどんな意味を込めようとしたのかを検討してみたい。なお、『太郎冠者』の著者は、霞城山人とあるので、以下原則として中川重麗を霞城と呼ぶことにする。また、原則として狂言独特の用語、たとえばシテ、アドなどは用いない。

## 一 遊戯としての演劇

『少年園』二二号(明治二二年一月一日)に「子供の茶番狂言」という記事が掲載されている。「文明社会の活発なる人民となるには、滑稽もまたときに必要あり、諧謔も亦或は入用なり」と始まる一文で、西洋では子どもたちの集会等で短い劇が演じられると紹介し、読者も演じられるようにと、無言劇を掲載している。五号(明治二二年一月三日)掲載の「新年の餅(小供芝居)」とともに、「わが国の児童劇の源流」の提示とされるものである。<sup>(8)</sup> どちらも無署名であるが、「編輯部の中川霞城の執筆であろう<sup>(9)</sup>」とする推定に従いたい。

「新年の餅」には、「この小供芝居「新年の餅」は独逸の遊戯書中より訳せしものにて、実に少女の遊戯に係れり(引用者略)唯是れ一例を示して世の心ある人に小児の為に斯かる遊戯芝居を作るも亦其幸福を増すの一端ともな

らんとの意を表したるに過ぎず」云々と前書きがある。霞城は、『学校家庭遊戯全書』を仙郷学人(山県悌三郎)・高橋太華らと共訳しており、ほかにも遊戯を紹介する書籍を出版している。劇も含めて、早くから遊戯には関心を持っていた。また、狂言への関心を示すものとしては、たとえば『教育報知』一五二号(明治三二年一月五日)に「戯稿」として掲げた「鶯鳥教師(狂言批評)」があげられる。狂言「いろは」を引用しつつ、その意味を霞城流に解釈したもので、「鶯鳥教師」の題名はペスタロッチに由来すると述べて、狂言「いろは」に登場する親の教授法を批判し、「この類の(子ども)のことを考えない(引用者)教師少なしとせず(三頁)と結ぶ。後年にも、狂言を対象に、「狂言の可笑味」を『懸葵』に七回連載している<sup>(11)</sup>。

霞城は、『太郎冠者』の刊行に先立ち、『剣舞と狂言』(中山治次郎編 張弛館、明治三三年二月三日)<sup>(12)</sup>を出している。その「緒言」にいう。

少年文武第九号の館説に述べたる少年茶話の材料として二三の詩と狂言とを編集したるものにて固より少年娯楽の一端に供するのみ

『少年文武』九号の「館説」とは、巻頭に置かれた「剣舞と能狂言<sup>(13)</sup>」と題された一文である。そこで説いたことを実行するための参考書が「剣舞と狂言」であった。「剣舞と能狂言」の内容は、次のようなものである。

まず、読者に、読書会、詩文会、幻燈会などの「夜話集会」を勧め、「夜話集会は務めて修学研究上の目的を以てすべしと雖も、然れども亦た時に或は各自随意に遊戯を行ふて、苦学の労を慰するは少年生活の神聖なる特権なり」と集会の余興の意義を説く。なかでも剣舞と狂言が「最も壮快にして、最も娯楽多きものならん」と推奨し、まず剣舞については、「剣舞は既に諸子の知る所なり、否、諸子の中には既に幾度も剣を抜いて舞ひたる人もあらん」と語りだす。「幾度も剣を抜いて舞ひたる人もあらん」というあたりに、『少年文武』がどのような少年層を念

頭に置いていたかがわかる。剣の注意にしても「刃引きして居合赤桐刀の如く切れざらむべし」とみえ、刀が身近にあることが想定されている。

なぜ剣舞かという理由は明確に述べていないが、霞城と同じく武士階級出身の江見水蔭の剣舞に対する思いに通じるものがあつたからではないかと推測される。水蔭は、『幼年剣舞<sup>14</sup>』の冒頭で、「士気を鼓舞せしめるには、至極好い遊戯<sup>あそび</sup>」と述べ、「日本魂を發揮すると言ふ、勇ましい気性を養成する」のに、「剣舞が、最も適当であらう」と説く。『太郎冠者』の巻頭に置かれた「決闘」は〈日本魂〉を強く訴える内容を持つ。スペイン人と決闘することになった日本人が、日本は、「神武天皇以来、尚武の国」で、刀で勝負するのは「名誉な武士同志のこと」で、毛唐人との立ち合いには使えないと鎌を取り出し、首に引つ掛けて、掻き落としをやるうと提案し、相手を負かす。水蔭の説くところと霞城の〈日本魂〉に対する思いは、ほぼ同じとみられる。

霞城の言葉に戻ると、狂言は、「剣舞の悲壮なるに反し、滑稽のものなり、茶話会には最も興味多きもの」だが、剣舞よりは難しい。「言葉の古雅なる口調」「身振りの異様なる」点や、「歩き様の固有なる」点などは文章ではわかりにくい。見ればすぐわかるが、見る機会に恵まれない地方の少年は、狂言を知る人に聞いたり、絵図でその一斑をうかがってほしいという。衣装は、紙で自作したり、「長袴は背の高き阿兄の袴を借り」たり、「狩衣は父の羽織を前より着れば事足るべし」というように、具体的である。「諸子試みに或は大名となり、或は太郎冠者となるも亦一興ならずや」と、勧める。

『剣舞と狂言』の目次を見ると、「剣舞の詩」「古狂言」、「新狂言」、「遊戯」と大別されている。「古狂言」は、従来の狂言で、「新狂言」には、「髭学生」「束髪嬢」「糟食書生」「胡麻菓子」「パノラマ」の創作四編（新狂言の助数詞は編とする）がみえる。これらは改題して『太郎冠者』に収録している。

## 二 『太郎冠者』の検討

『太郎冠者』も先述の『剣舞と狂言』と同じく、遊びの参考書として出されたものである。「はしがき」に『太郎冠者』の性格が述べられているので、やや長いが引用する。

山人戯れに『日本』の諷叢に狂言を掲げ初めしに意外に世の読者の喝采を博しぬされど是は作者の作の妙なるがゆゑにあらざ狂言の一種古雅にして滑稽なるによる而して此の古雅と滑稽とは山人が亦た幾回か彼の悲壯慷慨なる剣舞と俱に無邪気なる少年の遊戯に供し興味最も多からんと唱道したる所なりされば今茲に此戲著ある其意知るへきのみ少年が茶話の席上に鞭声肅々の不識庵となり又た腰間秋水鉄可断の薩摩隼人となりたる余にやるまいぞくと啞々の笑語を聞くを得は作者の望み達せりと謂ふべし唯た誠しむ異日文明社会の能舞台にシテとなり大名となるは好し無識無能の鈍太郎となり太郎冠者とはなる勿れ

一八八九（明治二二）年、霞城は「日本新聞社」に入社し、翌年六月二二日『日本』紙に狂言を掲載しはじめ。『懸葵』の中川四明翁追悼号で、内藤鳴雪が、「第一面の末に度々時事を諷刺した狂言の文が出て居て、いかにも軽妙な滑稽を云つてゐたので、私は常に愛読してゐた」と往時を振り返っている。「読者の喝采を博し」たのは、「狂言の一種古雅にして滑稽なるによる」と霞城は謙遜するが、愛読者はいたのである。

「滑稽」において、「古雅」は、具体的に何をいうのか明確ではない。しかし従来狂言の言い回しを多く使っているのに、狂言特有の表現をいうかと思われる。日常から離れた古めかしい言葉で、滑稽な話を語ることで、滑稽さが増大する。このような方法は、犬の敵討ちを馬琴張りの文体で書き、広く迎えられた児童文学の嚆矢とされる小波の『こがね丸』にも通じる。ストーリーの内容と表現のギャップが、滑稽を増幅するのである。

末尾の「異日文明社会の能舞台にシテとなり大名となるは好し無識無能の鈍太郎となり太郎冠者とはなる勿れ」は、やや唐突であるが、当代の時代状況に対する霞城の思いがストレートに記されている。このような〈ナシヨナリズム〉は、霞城一人が抱いたわけではなく、当代のマスメディアには普通にみられ、人々の共通した思いであった。

「はしがき」に続いて「注意」がいくつか列挙されるが、そのなかに、内容について述べた次のような箇所がある。此書は少年の遊戯の為に戯れに著はしたるものなり、材料は内外名士の逸事奇譚を主とし、或は本邦の書に採り、或は西洋の書に採り、或は又新聞雑誌等より採りたるもあり、東西古今一ならず要するに狂言として趣味多きを撰みたるのみ、

これによって、目的と内容がわかる。ほかの「注意」には、純粹に「古雅なる言葉遣い」は採っていないこと、少年にわかり易く、演じ易いことを旨としたこと、などを述べている。さらに、「又た謡ぶしにて謡ふべき文句には、右傍に点を施したり、少年は適宜に謡を以て謡ふべし」とも記している。真似事でも「謡」のできる少年が、前提になっているのだが、そのような少年は限られていただろう。その意味では、多くの少年たちが楽しんだわけではなかった。霞城の視野に、謡を知らない多くの庶民の少年は入っていない。

新聞の広告には、「はしがき」と「注意」の要点が謳われているので、蛇足ながら紹介しておく。

本書は 霞城山人が独特の筆法を以て 材料を東西古今名士の逸話に採り 巧みに狂言に物したるものにて 古雅なる口調 飄逸なる滑稽 真に少年社会の一奇書なり若し夫れ一本を購ひて 歳晩の茶話会新年の遊戯会に緋かば鬼人も哄然笑ひ 七福神も亦啞然笑ふなるべし<sup>16)</sup>

『太郎冠者』の収録作を、掲載順に番号を付け、題名と筋に關係深い人物、事柄を( )に示して次に示す。

7 (藤本)

- 1 決闘 (日本人)
- 2 髭剃 (セント、フエー)
- 3 米搗先生 (福沢諭吉)
- 4 きんかくし (帆足万里)
- 5 井筒デオゲ子ス (三宅雄二郎 (雪嶺))
- 6 小僧三箇條 (徳川家康)
- 7 奉加帳 (大久保彦左衛門)
- 8 五色の鳶 (大久保彦左衛門)
- 9 二人聾 (タオブマン)
- 10 鸛 (プリユッヘル)
- 11 髻紳士 (前島密)
- 12 飴壺 (二休)
- 13 贅肉爺 (瘤取り爺さん)
- 14 鼻糞 (代議士)
- 15 東湖先生 (藤田東湖)
- 16 詩盗人 (フリードリヒ第二世王・ボルテール)
- 17 鼎かぶり (仁和寺の法師)
- 18 英人と仏人 (モンテスキュ・チエステルフィルド)

- 19 鶴大名 (太郎冠者)
- 20 凱旋門 (桜洲山人〔中井弘〕)
- 21 髭はへ薬 (大学生)
- 22 おてんば (女子学生)
- 23 ごまかし (田舎の書生・すっぱ)
- 24 糟食書生 (貧乏書生)
- 25 幟画 (田舎の書生・すっぱ)

最後の五編は、『剣舞と狂言』と内容はほとんど同じだが、表現が一部狂言風に変えられている。また題名も変更され、「髭学生」は、「髭はへ薬」、「束髪嬢」は「おてんば」、「胡麻菓子」は「ごまかし」、「パノラマ」は漢字表記に変えられている。このように改題したのは、内容をわかりやすく示そうとしたからであろう。たとえば、「髭学生」は、髭のある学生ではなく、髭を生やしたい学生のことであり、「束髪嬢」は、男女同権を女学生の立場から戯画化したもので、積極すぎる女子学生を揶揄した「おてんば」と改題されている。「ごまかし」は、菓子の名前と不正を働くという意味をかけた洒落を生かすために、仮名表記に変えている。

この他再録作品は、『少年文武』掲載の「仁和寺の法師(徒然草)」(第二年三冊、明治二四年三月、「鼎かぶり」と改題)、<sup>[17]</sup>『小国民』誌に掲載の「東湖先生」(第四年三号、明治二五年二月三日)、「博士タオブマン氏」(第四年一二号、明治二五年六月一八日、「二人聲」と改題)の二編、および『日本』紙から「鶴大名」「鼻糞」の二編。なお、「博士タオブマン氏」と同じ内容のエピソードが、『中外電報』紙の「逸事奇話」欄に「タオブマン氏の洒落」として掲載されている(明治二四年三月二八日)。ほかに同欄には、「英人と仏人」と同じ内容の「モンテスキウとロイド、チエス



「テルフィルト」もみえる。短いエピソードとして紹介したものを狂言化して『小国民』や『太郎冠者』に収録したものと考えられる。『中外電報』には狂言の掲載もあるが、『日本』の狂言と同じく政治を諷刺したものがほとんどである。霞城の作かどうかはわからないが、もしそうだとすると少年向けにはふさわしくないと判断されたものだろう。

『小国民』には、後述のようにほかに狂言が掲載されているが、無署名だったり匿名だったりで、霞城の筆になるかどうかの判断は難しい。「東湖先生」「博士オブマン氏」には、ともに「豪傑物語 少年狂言十八番」とシリーズ名が示されている。このシリーズ名の表記はこの後なくなる。全部で一八編を予定していたと推測されるが、何らかの事情で中断したもののか。ただ、「豪傑」とは、この場合著名人というぐらいの意味らしいことを考えると、『太郎冠者』刊行後の『小国民』には岸田吟香や池大雅が登場する狂言が掲載されているので、シリーズ名を略しただけなのかもしれない。もしそうであれば、それらの作者である「明治太郎冠者」というのは、霞城のことになる。さて、二五編を通して特徴を三点あげてみる。まず、世間的に評価の高い人物を实名、あるいは実名をもじって登場させ、諷刺していること。新聞広告にも謳われていたように、有名人のエピソードが大半を占めているが、時代の多くの伝記や歴史譚のエピソードのように、教訓的なものはほとんどない。たとえば、「米搗先生」は、福沢諭吉が健康のため米搗に励んでいるところへ塾生がやってくる。塾生は、「雪池」と書かれた諭吉の反故を見つけ、先生は人の雅号の使用を笑ったのに、これは「セッチ」という雅号ではないかと問い詰める。すると、「雪池」と書いたことは認めつつ、「ユキチ」と読むと、塾生と押し問答になる話。あるいは、「きんかくし」の由来を尋ねられた儒者の帆足万里が返答できなかったことや、「井筒チオゲニス」は、ディオゲネスにあこがれる学生の三宅雄次郎(三宅雪嶺を思わせる)が、赤門前におかれた井筒に偉大な哲学者を真似て入り込み、桶職人に叱られるなど、有名

人を揶揄する。古今を問わず名のある人物を嗤うことにより、よくいえば、その人物の窮屈なイメージを破り、卑近な印象をあたえる。諷刺することで、権威主義的な見方を解放する。ただし、非凡な著名人にも（凡人らしい人間味）があるというようなことを描こうとしているわけではない。

二つ目には、教訓的な内容のものがあること。家康のエピソードとして知られる「小僧三箇條」のような格言を狂言仕立てにして、教訓的な内容としている。「鼎かぶり」は、よく知られた「徒然草」にある仁和寺の法師の話。軽はずみな行動を戒める話とも読める。

『劍舞と狂言』から再録した狂言は、すべて書生（学生）を主人公にした失敗談である。「幘画」<sup>パノラマ</sup>にはすつぱが登場し、都会の危険な面を描いて、都会にあこがれる地方の少年たちへの警告とも受け取れる。ほかの書生の登場する狂言も、少年たちに身近な人物として書生を主役にしたのかもしれないが、反面教師の役割をはたしてもいる。

三つ目には、従来の狂言にはみられるが、『太郎冠者』には含まれないジャンルがある。そのようなものとして気になるのは、従来の狂言でいう「女物」と「閻魔物」「鬼物」などに類する非現実的な話である。「女物」での例外は、「おてんば」で、男勝りの束髪女学生が、「女尊男卑」をモットーに男を追い回すという、「髭櫓」「鎌腹」の女性を連想させる展開を見せる。しかし、「蟹山伏」「蚊相撲」のような非現実的な話はない。現実のデフォルメはあるが、想像力豊かな話を楽しむという点に欠けているのは、読者層を考慮し、非現実的な内容は避けたからかもしれない。

### 三 従来の狂言からの影響

狂言の魅力として「古雅なる口調」が広告に謳われていた。実際、『小国民』掲載作を、『太郎冠者』に収録する

ときに、手を入れている。どのような修正がなされているのか、「博士タオブマン氏」と「二人聾」の冒頭部分を示してみる。

(A) 「博士タオブマン氏」『小国民』

(博) 隠れもない独乙の博士タオブマンとは、某の事ぢや。サクゼンの撰拳候は、殊の外某に御目掛けられて下さるゝ、此中、北の方が、女房を召し連れてくるやうにと、仰せられた。其の時、某は、女房は鉄聾で御座るに依つて、成りますまい。ともうしたれば、鉄聾でも苦しくない。耳の側で大声に話さう程に、連れて参れ。と御意なされた。今日は女房を召し連れて、参らうぞ。女房おいやるか。(女) 是れにをります。(博) 撰拳候の北の方が、卿を召連れて来い。と仰せられた。今日は一所に行かうと思ふが、何とあらうぞ。(女) 其は嬉しう御座る。万望連れて下され。(博) さりながら、一ツ気の毒なことがある。北の方は 鉄聾ぢや程に、御挨拶を申すも、御話を申すも、口を耳の側へ寄せ、大きな声でお言ひやれや。(女) 心得ました。易い事ぢや。(博) 然らば、すぐと行かう。

(女) 心得ました。(博) さあく、おジヤれく。撰拳候には、いつもく、御懇になし下さるゝ。此の上もない難<sup>マ</sup>有いことぢや。(女) なかく。仰せらるゝ、通り、妾までも斯様に召さるゝは、辱けないことで御座る。

(B) 「二人聾 一名 博士タオブマン」『太郎冠者』

(博) タオブマンとて、隠れもない博士でおりやる。日頃御寵愛下さるゝ、撤遜の撰拳候の奥方が、此中参殿の致いたる時、一度女房を連れて参れと、仰しられたに依り、女房は鉄聾で御座る、口を耳の側へ持て参り、大きな声で申さねば、何も聞えませぬ、と不図出放題な虚言を申上げたれば、夫れでも苦しう無いに依つて、召し連れて参れ仰しられた、迷惑なれども参らずばなるまい、思ひ付けた、一ツ面しろい滑稽を致いて呉りよう、

女房のやるか、(女) これををります、(博) そなたを呼ぶは別儀でない、撰拳候の奥方が、卿を連れて来いと仰しられた。日頃御懇になされて下さる、奥方のことなれば、是より同道の致さうと思ふが、何とあらうぞ、(女) 迷惑なれども是非も御座ない、参りませう、(博) うれしやく、早速聞入れて給つて、うれしう御坐るぞ、併し茲に、一ツ困つたことには、奥方がきつい鉄髯じや、耳の側へ口をもて行て、大きな声で物を言はしめ、(女) 心得ました、声で言ひ是程の声ならば好うおりやるか、(博) よいともく、恠びくりしたは、さらば往かう、(女) 手を又で往きませう、(博) 斯うして卿と一所に行かうならば、殿の奥方も、定めてきつう御満足でかなあらう、(女) またいろく結構なものを下さりませう、

(B) の「隠れもない博士でおりやる」(傍線引用者、以下同じ)「滑稽を致いて呉りよう」「そなたを呼ぶは別儀でない」などは、狂言によくみられる表現である。ほかに、「古雅」な表現をいくつか指摘すると、(B) の、「御座る」「仰しられた」「苦しい無いに依つて」「ゐやるか」等々が該当しようか。

ストーリーはほぼ同じだが、気になる個所がある。女(妻)の(A)「其は嬉しう御座る」が、(B)では「迷惑なれども是非も御座ない」と反対になっているところである。喜んでいくのか、いやいや行くのかは、のちの筋の展開と、さほどの必然性はない。ただし、(B)「迷惑なれども是非も御座ない」という妻のセリフは、のちの「またいろく結構なものを下さりませう」というセリフと矛盾するように感じられる。にもかかわらず、「迷惑なれども是非も御座ない」としたのは、博士の「迷惑なれども参らずばなるまい」というセリフに対応しているからであらう。博士は、「出放題な虚言を申上げ」だから、参上しにくいのである。(B)の方が、そういう点では発言に必然性がある。論理的と云つていいかもしれない。科学から学問をはじめたという霞城の論理性といえは言い過ぎだろうか。

文体だけでなく、ストーリー展開にも狂言の方法が取り入れられている。一、二あげてみると、すっぱが登場し（登場人物などを紹介する文章に、「すっぱ」とある）、主人公をだまして金銭をまきあげる展開は、狂言の典型的な型の一つであるが、「ごまかし」「幟画」などがそれに該当する。また、霞城と推定される明治太郎冠者の「植物学者」〔『小国民』第六年二号、明治二十七年一月一八日〕では、ウサギに化した学者が、耳が長い、跳ぶなどと言われてその通りやろうとするが、これは「柿山伏」の烏や猿の鳴きまね等と同趣の滑稽さがある。山伏が学者に置き換えられ、からかいの対象となっている。学者は、かつての山伏に相当する人物として扱われているようである。これ以外にも、後述のように霞城作と推定される「昼寝」〔『小日本』明治二十七年六月一日〕では、学者が、学問のためではなく、昼寝をするために図書館に出かけるなどと、諷刺の対象となっている。

富田博之は、『太郎冠者』を高く評価する。

中川霞城の仕事の中では、『少年狂言二十五番 太郎冠者』が、少年にも演じうる、狂言スタイルをとった小品脚本集として、いま読んでもおもしろい。狂言の構成の中に、たくみに明治の風俗や少年向けの教訓を織り込んで、まとまりのある諷刺喜劇をつくり出している<sup>(18)</sup>

確かに、今読んで面白く読めると思う。しかし、その面白さは、狂言という形式にあり、なかならずかなりの部分「古雅」な文体や言葉の洒落によるところが大きい。富田の指摘する「少年向けの教訓」は、「小僧三箇條」を除くとあまり感じられない。教育的な姿勢よりも娯楽を重視していたのであろうか。

#### 四 『太郎冠者』以外の狂言

この時期の新聞雑誌をすべて調べたわけではないが、霞城の署名のある狂言は少ないようである。管見に入った

ものの多くは、匿名や無署名である。霞城と推定できるものもあるが、不明なものもあるので、ここでは、先述のもの以外は内容の検討を保留し、書誌的な点に触れるにとどめる。

霞城の署名のあるものとしては、次の二点が管見に入った。

題名 署名 掲載

梅見 霞城山人 『少年園』(九卷一〇五号、明治二六年三月二日)

烏公達 霞城山人 『少年園』(一〇卷一一八号、明治二六年九月一八日)

次の『小日本』紙に掲載の二点は、無署名だが、後述のように、ほぼ霞城と断じてよいと思われる。

昼寝 無署名 『小日本』(九六号、明治二七年六月一日) 少年狂言(其一)

地震 無署名 『小日本』(一一七号、明治二七年六月一日) 少年狂言(其二)

『小日本』は、霞城が狂言を掲載していた『日本』から派生した家庭向けの新聞である。「昼寝」は、「少年狂言(其二)」と題名の下に記されている。「其二」として掲載された「地震」には、ペスタロッチやヘルバルトをもじった名前の登場人物が出てくる。さらには、「少年狂言」という語と、『日本』に霞城が執筆していたこと、諷刺の内容などからみて、中川霞城の筆であろうと推定される。

霞城は、『日本』にはかなり狂言を執筆しており、その最初は、一八九〇(明治二三)年六月二日「諷叢」欄に掲載された「池の端の紳士」であるかと思われる。八〇〇万円の借財の取り立てに来た金貸しに身代限りを渡さねばならないが、金がない。そこで、太鼓と笛を渡し「八百万神の神代神楽」だという内容。「ハッピーヤクバンジンノジングイカグラ」の音を「ハッピーヤクマンエンノジングイカギリ」に通わせるといふ洒落である。前文に「或新聞に楽器二点を守って八百万円の抵当の編笠としたる紳士あるよしを記せり」とあり、創作のヒントを明かしている。

新聞記事をヒントにした狂言では、ほかに「鶴大名」があり、これは『太郎冠者』に収録している。なお、『太郎冠者』の発行された一八九二(明治二五)年までに掲載された狂言は、ざっと調査したところほぼ八五編にのぼる。国会開設時以降、「国会狂言」として発表されたものが多い。ただし、無署名なのですべてが霞城の筆になるものかどうかは厳密に言えば不明となるが、まず霞城の作であろう。

『日本』に掲載した狂言からは、先述の「鶴大名」(明治二五年三月二五日)のほかに、「鼻糞」(明治二五年四月二五日)を『太郎冠者』に収録している。二作とも再録にあたり大きな変更はなく、ほぼそのまま単行本に収録している。読者対象として、政治がらみの内容を避けた以外は、大人と少年との違いは、とくに考慮されなかったようである。

太郎冠者、あるいは明治太郎冠者の名で『小国民』に発表された狂言がある。次に列挙する。

- 賄方征伐 太郎冠者 『小国民』(第五号、明治二六年一月一日)
- 豚尾髪 明治太郎冠者 『小国民』(第五号、明治二六年二月一日)
- 独講釈 明治太郎冠者 『小国民』(第五号、明治二六年九月三日)
- 植物学者 明治太郎冠者 『小国民』(第六号、明治二七年一月一日)
- 大雅 明治太郎冠者 『小国民』(第六号、明治二七年二月一日)
- 美術家 明治太郎冠者 『小国民』(第六号、明治二七年八月一日)
- 葱食兵士 太郎冠者 『小国民』(第六号、明治二七年九月一日)
- 油絵師 太郎冠者 『少国民』(第九号、明治三〇年一月一日)

このほかにも芋仙の署名のある「血液分析」がある。殿様カエルの死因を、血液分析で探るといふ理科的内容を

持っているもので、一見霞城の作かとも思えるが、芋仙は「理科十二カ月」シリーズの著者で、『小国民』の編集顧問でもあった石井研堂の筆名坂芋仙のことと推察される。また、「果物狂言」(『小国民』第二年一八号)も霞城作の狂言と推測されているようだが、冒頭と結末が狂言の形式ではないこと、文章に狂言独特の表現がみられないので、「狂言」とはあるものの、「能狂言」ではなく、「歌舞伎狂言」というべきものである。

(明治) 太郎冠者と署名のある作品群には、「豚尾髪」には岸田吟行、「大雅」には池大雅というように著名人が登場する。また、「独講釈」は、法学博士の講義がつまらないと生徒がエスケープする話である。有名人を实名で登場させたり、権威を揶揄したりするようなところからは、霞城の可能性が高い。

## 五 文廼家の狂言

この時期、創作の狂言に筆を染めたのは、霞城だけではない。『小国民』のライバル誌の『幼年雑誌』、およびその少年版の『日本之少年』にも、少数だが狂言が掲載されている。文廼家主人「柿うり」(『幼年雑誌』二卷一七号、明治二五年九月一日)、無署名「化学悪戯学士」(『幼年雑誌』二卷一九号、明治二五年九月三〇日、以下「悪戯学士」、文廼家主人「新狂言酔大黒」(『日本之少年』四卷一九号、明治二五年九月三〇日、以下「酔大黒」、文廼家主人「狂言投書男」(『日本之少年』四卷二〇号、明治二五年一〇月一四日、以下「投書男」)である。無署名の一作を除くと、すべて文廼家(または文廼家)である。文廼家とは、須永金三郎の筆名。無署名も内容上、須永のものと考えられる。須永金三郎は、『博文館五十年史』によれば、栃木県足利の人で、「硬軟両様の筆を執り、『日本之少年』の発行部数を増加し、数年後には其頃に例のなき毎号約一萬部ほどに上らしめた」が、「明治二十六年六月退館」<sup>(19)</sup>した。

文廼家が狂言を書いたのは、あるいは、『剣舞と狂言』の出版もヒントになっているのかもしれない。「新狂言」



という表現（新狂言醉大黒）も『剣舞と狂言』と同じである。もつとも「新狂言」は誰しも思いつきそうな名称なので、確証とまではいえない。ただ、『剣舞と狂言』の影響があったかどうかはともかく、創作の狂言は、読者に受け入れられるとの判断があったものだろう。『日本之少年』では「余興」欄、『幼年雑誌』では「工芸遊戯図画文章」欄に掲載されている。『剣舞と狂言』が遊びのための参考書だったと同じく、娯楽の一つという位置づけである。ごく短い笑話（小話）のやや長文版というくらいな方だったように思われる。

文道家の狂言には、諷刺がほとんど感じられない。「柿うり」は、お百姓の柿をいくつか買った旅人が、売り手が金銭の計算ができないのでごまかそうとするが、変だから目の子算にしてくれといわれて窮する話。ずるいことをしても失敗するという教訓を指摘することもできようが、金額の計算が具体的に細かく述べられているので、計算ができないのは九九を覚えていないからだ、勉学の重要性を匂わせる。

「悪戯学士」は、「化学士」が、白粉と化学反応を起こす薬品で美人の顔を黒くする悪戯をする。化学反応の説明部分が理科読物を思わせる。算数や理科の知識などを内容とするところは、諷刺よりも勧学をテーマにしているように思われる。『日本之少年』掲載の方は、そういう教訓的なところは希薄である。「醉大黒」は、欲張り男が、酔った大黒に水を所望される。冷水を差し上げる代わりに福を授けてほしいと願うと、大黒は承諾し、二杯水を飲んで、打ち出の小づちを振れば宝の代わりに簪や白粉などが出る。どうしたことかと男が聞けば、一日飲み続けたので、「ちよつと小間物店をだしたまでぢや」と洒落で終る。「投書男」に至っては、投書で名を上げようとする男が主人公。「才はぢけ者はいつも日本之少年に投書するとの事」だからと、掲載してくれと『日本之少年』の編集者に会いに来る。しかし、内容が古臭いと断られ、鬼の面をかぶって脅しにかかり、掲載をとりつける。腹が減ったと昼飯をおごらせて正体がばれる、という楽屋オチのような笑話。霞城の作品にみられたような権威への諷刺精神は

ほとんどない。

ほかに、巖谷小波の『春駒』(博文館、明治二十七年二月)があるが、小波は狂言の形式でお伽噺をほとんど書いていないので、『春駒』は例外的な作品である(小波は、「口條」で狂言といわず、「猿楽」と記す)。『太郎冠者』から二年後の出版で、霞城の影響もあるかもしれない。小波が日出新聞社に在職のころ、霞城もまた同社に勤務していた。霞城の狂言はいずれも短く、実際に演じることも可能であつたろうが、小波の作は、長編で、子どもたちの遊びに演じるといふ性質のものではなく、読物として書かれている。ただし、ちゃんとした舞台に乗せる可能性も考えていたようで、その旨を「口條」に述べている。<sup>(20)</sup> 富田博之のように、新味がないと否定的な評価もある。<sup>(21)</sup>

## 六 大正時代の『お伽狂言』

『太郎冠者』以後も、子ども向け狂言は少数ながら出版されている。しかし、大きな反響はなかつたようである。そんななかで、注目されるのは、久門南海・戸川耕山共著による『お伽狂言』(同文館、大正二三年三月二五日)である。子どもの演じる劇の脚本である坪内逍遙の『家庭用児童劇』(早稲田大学出版部、大正二年)とほぼ同時期出版である。手元にあるのは、三版(大正一三年四月七日)だが、数週間で三版だから、ある程度話題になったのだろう。四版以上は未見。「緒言」では、「此の本に載せた十種のお伽狂言は、日本始まつて以来始めてできた、真の教育的芸術である」と自負を語り、狂言は「全くの創作」で、各所の会合で好評を得たものと、自負の裏付けを説明する。「真の望みは之を家庭及学校で子供に演らせたいのである」と、子どもの演じる劇を目標にしているために、二、三人でできるようにしていること、衣装も特になくとも結構面白いと主張。読んでも有益な「お伽本」だと付け加える。子どもが演じるといふ点では、霞城と同じだが、「教育芸術」とする点に大きな違いがある。巖谷小波、

久留島武彦、岸邊福雄らが序文を寄せているが、そのうち岸邊福雄は、「児童情操教育の上に多大の力を致すもの」だと、著者たちに賛同の意を表している。永井鱗太郎は、この『お伽狂言』に触れて、著者たちは、新作の子ども向けの狂言を上演したが、「これが、戦前にのこされた、狂言運動のただ一つの足跡であった」<sup>(22)</sup>という。

全一〇編を収録するが、そのうち「眠り仁王」を一例として紹介する。仁王が居眠りをしたのを幸い、太郎が、仁王の草履や頭巾を借りる。仁王は目を覚ますと身に着けたものがなくなっているので、勝手なことをして罰があたりたつたと思い泣き出す。それを見て太郎も泣き出し、借りた訳を話す。仁王は、改心したのは可愛い、自分には子どもがいらないから、自分の子どもになってほしいという。太郎は、小さな仁王になって山門の番をするのは嫌だから許してほしいと詫げる。

太郎の改心が不自然だし、全体に皮肉めいたところも、諷刺も感じられない。仁王が居眠りをするというところに、幾分の面白さはあるものの、霞城にはみられた諷刺の〈毒〉が、ほとんどない。ただし、霞城にはない非現実的なストーリーは面白い。少年よりは低年齢の子ども向けだったからかもしれない。また、作品の結末のほとんどが、ハッピーエンドに終わるのも、「教育芸術」「情操教育」を意識したからであろうか。

戦後子ども向けの狂言は、姿を消し、短い劇が登場する。たとえば、富田博之は、狂言を現代風に書き直した脚本を「子ども狂言」と名付けて、『日本の子ども』六巻一号(昭和三六年一月一日)から連載している。狂言からヒントを得たので、「子ども狂言」と称しているが、形式は現代の劇である。連載開始にあたって次のような前書きがある。

今月号から連載されるこのげきは、だれでも、どこでも、やれる、やさしいげきです。子ども会や学級の集まりのとき、みんなで、たのしく、やってみましょう

子どもたちの集会での遊びというような位置づけは、霞城と同じである。霞城に始まった子どもが演じる劇は形を変えながらも、すくなくとも、この時期までは、命脈をたもっていたようである。

### おわりに

富田博之は、「剣舞や狂言が生まれた背景」を、「新しい教育体制の中」で、子どもには、「自然、天与の遊び」とは違う遊戯が必要になったが、それに、「一つの表現を与え、スタイルをつくり出したもの」が、「剣舞」や「少年狂言」だった<sup>(24)</sup>、と説明する。この説明では、何も知らない「子ども」に剣舞や狂言を提供しようとしたという印象が残る。『剣舞と狂言』や『太郎冠者』の読者は、「少年」であり、現在でいえば中学から高校生ぐらいである。しかも刊行されたのは、小学校の就学率が五〇パーセントに達するかどうかという時期である。読者対象となる「少年」は、恵まれた家庭の子弟と思われ、剣舞や狂言にまったく無縁だったとは考えにくい。すでに触れた『少年文武』の「館説」で、霞城は、すでに剣舞の経験がある少年もいるかもしれないと推測している。『剣舞と狂言』が出版された年に一九歳だった〈少年〉の巖谷小波は、『我が五十年』で、祖母の感化<sup>(25)</sup>により、「神楽が好きなくらいだから、無論能や狂言にも、子どもの割には趣味を持つて居た」と回想している。もちろんすべての恵まれた〈少年〉が、小波のように狂言に〈趣味〉があったとはいえないだろう。なかには、狂言の観劇経験がある者もいるという程度だったとしても、しかし、だからこそ、狂言を余興として推奨したのではないか。新しい演劇のスタイルがまだ普及していない段階では、余興に適する軽い寸劇として、少しでもなじみのある狂言よりほかになかったのではないか。

少年狂言とはいうものの、その形式に大人向け、少年向けという区分はあまり考えていないようである。『日本』

に掲載の狂言を『太郎冠者』に収録していることも、その根拠にあげられようか。著名人や偉人を教訓性とは反対の諷刺で笑うところが、権威的なものへの反撥を持ちやすい（少年）たちと響きあうところがあつたように思える。ただし、それは、著名人の失敗などは、反面教師としての側面も同時に持ち、そういう点では教育的でもあつたといえなくもない。

狂言の「古雅」な口調で、滑稽な、あるいは皮肉な内容を語るといふ落差は、より笑いを増幅したと思われる。それが、大正期になると、「児童情操教育の上に多大の力を致すもの」（岸邊福雄）のように、教育に取り込まれていく。と同時に、諷刺の魅力や力は減少し、たんなる笑いを誘うものになってしまった。

明治の児童文学の開拓期に、忘れ去られようとしていた狂言という表現形式に、少年たちの遊びの一つとして、諷刺の笑いを提供したことは、教訓的な読物がほとんどであった時代に、貴重な試みであつたといえよう。

※引用文は新字を使用した

#### 註

- (1) 生年には一八四九（嘉永二）年説もある。たとえば、稲畑汀子他編『現代俳句大事典』（三省堂、二〇〇五年一月一日）「中川四明」（担当渡辺順子）の項目。
- (2) 中川四明「第三卷に入るに当り」『懸葵』三卷一号、明治三十九年三月一日、一頁
- (3) 東徹「明治中期の少年雑誌における科学ジャーナリストの役割―中川重麗の場合―」『科学史研究』第二五卷（一六〇号）、昭和六二年六月三〇日、二四六頁
- (4) 教育関係のエッセイも多い。海外の教育思想の紹介や、自身の意見を雑誌等に掲載している。たとえば、『大日本教育会雑誌』七〇号（明治二〇年一月二六日）の「肉菓子論」は、従来の子どもの菓子は植物由来のものがほとんどで、「米麦ノ血

- 液ハ鳥獸肉ノ血液ニ及バザルコト勿論ナリ」(八八八頁)として、西洋と伍していくために肉菓子を推奨する。
- (5) 概説としては、清水貞夫「俳人四明覚書 六」(現代文藝社、二〇一三年七月)の「児童文学」の項目、上田信道「少年文武」創刊号から見た中川霞城の業績」(『翻訳と歴史』第六号、二〇〇一年五月)などがある。
- (6) 富田博之「日本児童演劇史」東京書籍、昭和五十一年八月二十四日、三四頁
- (7) 註6、三六頁
- (8) 滑川道夫「解説」『少年園』解説・総目次・索引」不二出版、一九八八年一〇月一日、一九頁
- (9) 註6、一九頁
- (10) ワクネル著、少年園出版部、明治三十二年四月
- (11) 『懸葵』八巻七号〜二二号(明治四四年九月〜二月)、九巻二〜三号(明治四四年四月〜五月)
- (12) 国会デジタル資料による。資料は、月日が手書きで訂正されている。本文に記したのは訂正済みの月日である。
- (13) 『少年文武』一卷九号、明治三三年九月一日、一〜三頁
- (14) 江見水蔭「幼年剣舞」「幼年玉手函」六巻、博文館、明治三十七年六月
- (15) 内藤鳴雪「四明氏について」『懸葵』大正六年七月、一五頁
- (16) 『読売新聞』一八九二年二月三日朝刊、四頁(『ヨミダス歴史館』(読売新聞社)より引用)
- (17) 未見だが、『少年文武』第二年六冊に「博士拝」が掲載されており、おそらく霞城の作品であろう。
- (18) 註6、三六頁
- (19) 坪谷善四郎、博文館、昭和十二年六月一日、三八頁
- (20) 「されば気まぐれな黒人ありて、是を舞台上に上ほさんと思はゞ、多少の手数を要すべし」三〜四頁
- (21) 「これは(引用者『新年春駒』)、狂言の様式にとられ、筋立は新しくなっているが、あまり新味がない作というほかなく、「お伽芝居」開幕も間近な、わが国の児童演劇の夜明けを告げる作品としては、やはり「春若丸」こそがふさわしいというべきだろう。」(富田博之『日本児童演劇史』東京書籍、昭和五十一年八月二十四日、三七頁)
- (22) 永井鱗太郎「学校劇凶説」岩崎書店、一九五八年九月三〇日、二七四頁、引用文の読点は、「」を「」とした。
- (23) 連載一回目の「太郎のしびれ」は、末尾に「狂言「しびれ」より」と出典を明らかにしている。なお「しびれ」は、正しくは「しびり(痺)」。
- (24) 『日本演劇教育史』国土社、一九九八年二月二日、一六頁

(25)  
『我が五十年』 東亜堂、大正九年六月二十四日、一七頁

(大谷大学短期大学部教授 日本児童文学)

(キーワード) 児童劇、中川重麗、児童文学